

## 金的空手少女2



玉子王子 著

## 一章 逃がさん、お前らだけは……雌虎少女の金的地獄

喫茶店。

制服の少女が二人向かい合って座る。

「強い人きますかねえ」

妙なアクセントの喋り方の美少女。小学生に見えなくもないが、高校生である。大型犬のようなおっとりした雰囲気。

うさぎ女子校、金城海子。

「強くてもあんまり意味ないだろ……だって男なんだから」

長身巨乳のかんりの美人、ぶっきらぼうな喋り方。北山高菜。男の急所を攻撃するのが大好きというドS娘。

彼女の前に立った男は多くが一瞬、股間に何か違和感を感じる。そこを雌虎に狙われているような、今まで経験したことがないのに、そういう状況にいるように感じてしまう。

大抵、気のせいと思う。極め付きの美人であるから、肉欲の高まりを感じる面のほうが大きく、本能の警戒はかき消されてしまう。

しかしその本能は正しい、雌虎は彼らの急所を狙っている。善人なので、口実がないとやらないというだけで、許されるなら大喜びで股座を蹴り上げてくる。

ナノテクノロジーが発達した時代であり、睾丸ぐらい一〇秒で治るナノメカ入りの薬がコンビニで売っている世界であるため、玉を持たない女たちはそこを攻撃するとなると特に遠慮はない。

特に、高菜のようなドSとなると遠慮などない。

ただ、それは常に全力攻撃を意味しない。彼女のような金的大好き女子はむしろ軽く蹴って男がそれでも動けなくなるのを見るのが大好きでもあるのだ。最終的には当然のように蹴り潰しに来るが。

しかも、彼女は古流空手の使い手である。金的など狙わずとも喧嘩慣れした男でも蹴散らす漫画のような技量を持つ。

それなのに、玉、玉ばかり狙ってくる。

強いのに玉を狙う、しかも女なので反撃で狙われることはない。

そんな男の天敵ともいえる危険人物とは知らない周りの男たちは、彼女連れでもつい高菜の巨乳を見ってしまう。

爆乳に近い均整の取れたスイかのような真ん丸な雌肉が揺れるのが気にならない男はいない。

連れのその目線に、女たちの表情は硬くなる。

巨乳美少女の発言に、ため息をつく海子。

「先輩……またそういうことを……だめですよ、それ」

「何がダメなんだよ」

「だから、空手の試合でサッカーしないでってことですう」

空手でサッカー。

何のことかわからない。周りで何となく聞いている女たちは不思議そうな顔をする。

だが、男たちは思い当たる。

いくら強くとも男なんだから意味ないという発言と、「空手でサッカー」という言葉。

男なら、その二つの言葉が一つの形で結びつく。

思わず、膝を締めた。

男たちには、守るべきものがある。

その動きを、古流空手の達人である高菜と海子はしっかり認識している。

気配と、訓練で培った周辺の動きを認識する広い視野など、漫画のような能力で。

ベロリ、と高菜が形のいい唇を舐める。

——聞いてくれてるな、ヨシ！ ああ、金の玉が不安か？ 五歳ロリに蹴られても「はぐうう、玉だけは許してください！」ってなっちゃう、弱点玉が不安か？ 仕方ないんだ、お前たちはぶら下げて生まれてしまったから……といっても赤ちゃんの時はまだ玉袋は空っぽでタマタマは腹の中だが……とにかく、玉をもって生まれた。その運命。女の子様にタマタマをやられるかも、と不安を感じ続けて生きるべき運命……私の言葉に思い出して、反応してくれてるな。玉を意識して、太ももの間でタマタマを守ろうと。

じつとりと、自分の女の部分が湿ってくるのを感じる高菜。

熱い息。トロリとした目に、引くしかない海子。

——あー、また始まったですう……なんでこう、タマタマ関係ですぐ興奮しちゃうんですかね？ ていっても、ママも空姉ちゃんもみんなそうで、私の身内の女ってみんなこんな感じのような。

ドS女子の割合が世界一と言われるうさぎ県的女子としては、高菜たちのほうがスタンダードかもしれないというのは言い過ぎでも、それほど珍しくはない。

「サッカーというと、アレだな？ ボールを……蹴る。ボールを、この女の足でグチョっと蹴り上げるあれだな」

「サッカーでそんな効果音でないですう」



「女の足で蹴り上げて、ゴリンゴリンと、押し潰すアレだな？　あるいはキーパーががっとボールを掴んで、女の手でも、ボールぐらいなら握り潰せるというあれだな？」

「サッカーボールをですか？」

「え、なんでサッカーボールなんだ？　いくら何でもサッカーボールってのは、リンゴ並みならわりといけるけど……一生使いそうにないキモオタとか結構ごっついものぶら下げて、潰し甲斐満載」

涎を手の甲で拭う高菜。

と、思い出す、「サッカーの話に偽装して金潰しの話をしている女」を装って聞いている男たちの反応を楽しんでいたことを。

手を叩く、ブルンとスイカ二つ。

「そうだった！　サッカーボール！　サッカーの話だった！」

「ええ」

「ボールだ、ボール！　男の！」

「はあ」

周りの男たちが今や膝をしっかり締めているのに気づきつつ、ため息をつく。

女たちは、目を輝かせている。

「そういえば、サッカーしたことある？」

「小学校の時に」

「やるよね、サッカー」

「反応が楽しいからね」

「そうそう。グニュっとした感触も面白いし」

「仕返しされないのが最高」

「こっちはついてないもんね、ボールが！」

喫茶店の女性たち——大体二〇前後のさりげなく着飾った大人女性——がサッカーの話題で突如盛り上がり始める。

それだけでも怖いのが、最も恐ろしいのは「自分はサッカーしたことないよ」という女性がどうも一人もいないらしいという事だ。

恐怖を感じるとともになんとなく気恥ずかしく、うつむいて赤くなる男たち。

——なんだよこいつら、玉の話を……サッカーに偽装してるけど、ばれてるってわかってるだろ。でも、「偽装」を言い訳にして……

膝を締める男。と、彼女がちらっと足の方を見ているのに気づく。

気づいたのに気づく彼女、ずっと目を逸らしつつ頬を緩める。

——あは、タマタマ守っちゃって。いくら男が強くても、そこを女の子に狙われたら一発だもんね、そりゃ守りたくなるわー。あー、玉なんかなくてよかった！

「お待たせしました」

男の店員がパフェを二つ運んでくる。チラ、と股間を見る高菜。心なしか内股気味だったのが、さらに膝が締まる。

頬を緩め、ご満悦の高菜。ドキリとする店員。

——股間見てこの顔……気がある……んじゃないんだよな、これ。さっきからの話聞いてる限り、たぶん俺が玉へのプレッシャーにビビったのがうれしいだけだ。ドS女……



パフェを手に取り、サクランボをつまむ。

「あ、見ろ海子」

「んー」

——よもやよもや、サクランボの形がタマタマに似ているとか……まあいいですんでしょねえ。

「このサクランボ、実が二つあるぞ！ 二子玉、二つ！ 玉二つ！」

「サクランボに実が二つあるぞって……マジでなんなんですかこの人？」

男性器仄めかしによって周囲の男らの目線をくぎ付けにする高菜に引くしかない海子。



連れに引かれても、高菜は全く意に介さない。

「あー、やっぱり玉は二つセット。一個じゃ不安だもんな、だって一個無くなったら玉無しなわけで。いくら再生するとしてもなあ、「一個だけは残して！」ってなっちゃうもんな。いや、サクランボの話だけど」

実の下を舌の先で舐める。テロテロと並んだ玉の下を横に舐める。

チラチラと、周りの男たちの反応を楽しみながら。

艶やかな黒髪で、着物が似合いそうな美少女。胸が巨大すぎるが、巨乳着物キャラに慣れた現代人ならそれをマイナスとは見ないだろう。

そういう風貌だとおしとやかではないかと想像されるが、今のふるまいはその予想を完全に裏切るものだった。

別に裏切ってもいい話だが、公共の場で二つの玉状の物体を舌を出して舐めるのは問題といえば問

題だろう。

「おらっ！」

突然、店の外から叫び声。

「北山、出てこい！ デカパイ巨○兵が！」

外、いかにもヤンキー風のいかつい男。シャツにシルバーの首飾り。髪をピンクに染めているのが今風だ。

周りには似たような仲間たち、ピンクだけではなく、いろいろ原色に染めていたり、そのままだったりといろいろだ。

「え、誰ですう？」

「わからないが、あの調子だと多分前にキ○タマ蹴り潰した奴の一人だろう。私の爪先の上を通り過ぎて行った男たちだ」

一○人ほど。

女一人に一○人だが、実際のところ高菜は漫画のように強く彼らが一○○人でも負けないだろう、何人か蹴散らした時点で士気崩壊して逃走という形になるに違いない。

だから一○人程度では自殺も同然だ。

立ち上がる高菜。

うれしくて仕方ない顔。

「ああ、世界中のタマタマは私のものだ」

「はあ」

言いつつ、高菜は裏口から出ていく。

店員は当然逃げるのだと思って何も言わないが、高菜は逃げる気などない。

「二○個二○個、私を待ってる肉玉二○個一」

「まあ女の子相手に一○人で暴力振るうような雰囲気見せるだけで、非常識ではあるですう……」

とはいえ、一○人位なら同じ道場で古流空手を習う海子でも問題なく蹴散らせる——というか高菜が海子の家がやっている道場に通っている——高菜ならなおさらとわかっているので少し複雑だ。

力の差は歴然。

にもかかわらず、後ろから回り込んで不意打ち、しかも股の間を狙いまくるつもり。むしろほかの部分攻撃するつもりはないほどの勢い。

楽しむために急所攻撃しまくるつものの**異常性欲者**にどうふるまうべきか。

ヤンキーたちの位置から高菜たちが座っていた席は見えない。

一人が入っていったのを確認し、仲間を呼んで外から叫んだ形である。

「キ○タマ潰された恨み、晴らせてもらうぜ！ 五回は潰されたから、計一○玉！ クソマ○コがああ、同じ回数チ○ポ入れる！」

「俺も俺も！」

「俺なんてキ○タマ潰された時になんかチ○ポ立っちゃって、逆レイプまでされたんだ、許せねえ…  
…今度は俺がレ○プする！」

物騒なことを言うヤンキーたち。

聞いていた高菜はにんまりだ。

——レ○プするかあ、これはキ○タマを潰してもいい流れだな！ ありがたし！

「レ○プするとか大っぴらになに言ってんでしょねこの人たち……」

ため息をつきつつも、何とか穏便に解決できないか考える海子。

——なんとか話し合いで済ませたいですう。……無理？

考えているうちに、音もなくヤンキーたちの背中に向けて走り出す高菜。

「おらおら！ 出てこい！ デカパイモミモミして……はぐっ！」

「え、おふっ！」

「なに、ちょっ」

「はひっ」

「ははははは！」

ヤンキーらの間を走り抜ける高菜。尻でも撫でるようにパンパンと股間を掌で払っていく。そのたびにへこっと腰を高速で引き、素っ頓狂な声を上げる男たち。

軽い一撃だが、男なら行動不能になるギリギリの線をつく金的熟練者らしい見事な攻撃。

喫茶店まで走り抜け、振り返る。

うんざりした顔でついてきた海子。

一〇人のヤンキーたち全員に、高菜は一撃ずつ入れていた。

奇襲で倒す、という事ではない。

「別に正面からでも勝てるですよ？」

「万が一逃げ出す野郎が出ないように、まず一発ずつ金的を入れておくんだよ」

イキり散らしていた一〇人の男が、腰を引いて股間を抑える。

長身の高菜より大体背は低いが、筋肉量はあって幅は二倍ぐらいありそうな屈強な男たちだ。

それが、軽く股間をやられればお終い。

そのある種の**お得感**も、高菜が金的を愛する理由の一つだった。

「ふぐうううう」

「ぬほおおお」

「たま、卑怯……」

「ふふふ、みんな、タマタマ痛いか？ ん？ お前はどうか？ 痛い？ 大事なボール、急所二個、ぺしっとやっただけだけど、もう動けない？ お前は？ ん？ キ○タマだよ、キ・○・タ・マ、痛い？ 痛いんだろ、動けないもんな」

明らかに性的興奮して、赤らめた顔で男たちの顔を覗き込んでいく。

頬を撫でる。

「ほらほら、言っちゃえよ。タマタマ痛いです、って」

「い、痛くね……あっ」

突如横から抱き着く高菜。

「おらー、いい度胸してんなこらあ！ うふふ」

「ちょ、ちょ、放せ……」

テレビでもまず見ない美少女、その上スラリとしたモデル体型でスイカップ。

そんなものに抱き着かれれば顔を真っ赤にせざるを得ない。一瞬後、たぶん**ほぼほぼ金的が**

来るだろう」思っても、男の性でついにやける。

その様を見て、つられてにやける高菜。

——あは、こいつだって私がキ○タマ責めてくることはわかってるだろうに、こんな顔。私がかわいいから、こういう反応になるわけだ。正直でよろしい。

褒めつつも、当然ながら金的への流れは止まらない。

彼らが嫌いであるわけではないのだ、反撃していいような言動をとってくれたのでこれ幸いと**性欲を満たすためにやっている**だけである、今更好意を持ちうる態度を取られても止まるわけがない。

むしろ金的大好き高菜ちゃんは相手に好意を抱くほど金的がしたくなるという危険人物である。

「度胸あり過ぎだろうお前、あはは……こんな弱点ぶら下げて！」

股間を抑える手をずらす。そしてペン。掌、カップで股間を包み込む。

「ふぐっ！　ちょ、はぐっ！」

「キーン！　痛いかな？　男の急所、痛いだろ？　カップでペン、と包むだけ。それで男は飛び上がる、はぐっ！　はははは！」

金的顔の真似をしつつ、ペンペンと嘲るような軽さで金的。それでも効くとわかっている。

腰を引きつつ、顔を真っ赤にするヤンキー。

「あっ、あっ、あっ！　ちょっ、やめっ、あっ！」

——こ、こんな……女のくせにこんなの確な加減できるなんて、どんだけ金的経験してんだ！？

その驚きはもっともだが、女だからこそ加減もできるという事情がある。

男なら半端な金的をかましたら、反撃で思いきりの金的が返ってくるかもしれない。

しかし女の場合その報復がないので、実験的な金的がしまくれるという理屈だ。

そうして練習し、ちょうどいい金的具合を体得できる理屈。

「腰引いても無駄だぞー。ほら、キーン！」

「ぐむっ！　こ、この女……いい加減に……あ」

「キュッと。何か文句でも？」

縮んだ肉袋に指をめり込ませるようにして肉玉を二つがっしり握る女の細い手。

にこ、と引きつった笑みを浮かべるヤンキー。

「いやあ、えへ、別になんの文句もおおおおおお！」

「嘘つきは男じゃねえ」

女の手が男の股座で握られる。女の手が男の急所を握り潰す。

つま先立ちで、真っ青のヤンキー。

「ちょおおおお、文句ある、文句あるうううう！　あおおおおお！　潰れるうううううう！」

愛撫するように指をもももぞと動かし、しかし睾丸に強い圧力はかけ続ける高菜。

目を見開き、膝を締めるがすでに握られている状態で金握りを防ぐ役には立たない。

「くううう、その反応、いいっ、最高だ。だがまだだ、最高潮まであと一步、最高潮に達するには……」

声を潜める。

「……したい」



小声、睾丸を握り潰されつつ、唾をのむヤンキー。

繰り返す高菜。

「……したい……したい……したい……したい」

囁く。

耳に口を近づけ、息を吹き付けつつ言う。

「きょ・せ・い、したい」

「ひいひいひい、そんな……」

去勢、それは一番男がされたくないこと。再生するから、といわれても絶対嫌に決まっている。

しかし、再生するからこそ、この目の前の巨乳美少女は絶対ガチでやってくるのがなんとなくわかる。

震え上がるしかないが、高菜はとろんとした目で続ける。

「去勢……したい、したい、お前の睾丸、睾丸二個とも潰して、お・ん・な、にしたい。チン○ン……は、残してもいい。だけど、お・チ・ン・○・ン、だけじゃ、役立たず。玉無し。玉無し。お股の間にボールがない、袋の中にボールがない。終わり、男終了。キ○タマを、女に潰され男終了」



「ひいい、やめ」

「ぶちゅ！ と、今のは口で言っただけー。ビビった？ ビビった？ 去勢されちゃったと思った？ おキ○タマキュッとなった？ 握り込んでからよくわかんねーなあ。次はどうかなあ？ 次も脅しだったらいいねえー、男でいられるもんねー？ 女の子様の慈悲に期待して震えて眠れ。それじゃ…」

「助けて、玉だけは……」

「ぶちゅっ！ はいガチ潰しー、二個ともぐっちょり！ 男終了！」

「ふぐおおおおおっ！」

ビクン、のけぞるヤンキー、白目を剥き、泡を吹く。

ギュッ、ギュ、とヤンキーの股間を握っていた手を、感触を確かめるように握り締める。先ほどまであったプチトマト二つがない。

「うふふ、残り一八個！」

男を玉の数で数える女、高菜。

「ひ、ひいいいい！」

震え上がるヤンキーたち、逃げようとするが、先ほどの金的でよろける。

高菜は握った手で、一物に反応がないか確かめていた。潰されたり、その直前になぜか立ってしまう現象が起こる場合がある。バグ勃起と呼ばれる。

子孫を残すための反応なのか、なんなのかわからない。

高菜はそれが大好きだった。

—— 一〇人もいるんだ、一人ぐらいバグ勃起してくれるかもしれん。というか、一人は前にそれやったらしい。話してたもんな。一回脱臼したら何回も起こるように、バグ勃起も癖になる……かどうかわからないが、その可能性はある、有望だ。うふふ、チン〇ン立った奴がいたら、ほかの連中の玉を潰したあとで、近くの公衆トイレにでも引きずり込んでサービスだな。

無理やり一物を使い倒すのを「サービス」といわれても困る。

と、目の前のヤンキー。

次は自分が、と思うと頭が真っ白になる。

「や、やめろお！ ぶっ殺すぞ！」

腰を引いたままだが、何とか両手はファイティングポーズをとる。

それに踏み込み、ペンと爪先を嘲るように軽く股間に減り込ませる。

「ふぐっ！」

へコ、と金的で弱っているとは思えない超高速で腰を引く。

満面の笑みで、自分も股間を押さえて引いて見せる高菜。

「はぐっ！ と、ははは。股間ががら空きだぞ。そんな男らしい構えはなあ、金の玉を持たない女の子様にしか許されないんだよ。わかる？ お前ら男は、タマタマがあるんだからこうやって……股間ガードする防御重視の構えしか許されないんだ。男らしくファイティングポーズなんて取ったらお前、タ〇キン蹴り上げるからな」

「おおおおおくむううう」

股間を押さえて腰を引き、グネグネと腰を振りだす。少しでも痛みがましになる不思議な動きだ。

それを指さす高菜。

「おい海子見ろ！ 見ろ！ こいつなんか踊りだした！ キ〇タマ蹴られて踊りだしたぞ！」

「はいはいキ○タマダンスキ○タマダンスですう、ぷっ、ほんとダサいですよねえ、この動きって」  
小学生めいた美少女に半笑いで見下ろされ、顔を赤らめるヤンキーだが、腰は止まらない。

——くうう、情けねえ、悔しい、玉がない奴にはわからねえ。こいつらは一生これやらないんだ、汚ねえ、その上の立場から一方的に玉狙いやがって……キ○タマもねえ女の癖しやがって。

ポロリと「上の立場」と考えてしまったことは気づかず、あえて見下す。心の中で。

口に出すと更なる金蹴りが来るだろうから、とても言えない。

と、その目に女たちが映る。喫茶店から、騒ぎを聞きつけて出てきた。

危ないといえば危ないが、関係ない女たちにまさか手は出さないだろう、街の真ん中なのだ。

……街の真ん中で男一〇人が女の子二人に喧嘩を売るのも無茶な話で、本来ならすぐ関係ない男たちが割って入ったことだろう。

だが、もはや周りの男は助けに割って入るどころか、むしろ同じ男としてヤンキーらに同情しつつ、自らの急所惜しさに、それを縮ませつつ立ち去るのみだ。

潰れても治るので、「惜しい」というより「金的怖さに」というべきか。

体験版終わり

この後、高菜たちはヤンキーらに玉潰し、  
海子の兄に玉潰し、  
強姦魔に玉潰しと金責め去勢空手ライフを満喫していきます。

もちろんガッツリ金的嘲笑も忘れずに。

続きは製品版でぜひお楽しみください